
ヘルプミー、坊ちゃま！
HELP ME, BOCCHAMA!
nugi

ヘルプミー、坊ちゃま！

nugi

目次

第１話　てめえの息の根を止めなかったのが俺の罪だ
第２話　この一家のノリはいったいどうなってるんだ
第３話　塀を越えてきた君
第４話　いちばん性悪な坊ちゃま
第５話　ヤバ、そしてヤバ
第６話　三角おにぎりも開けられない男
第７話　お見合い大作戦
第８話　長男坊ちゃま、降臨
第９話　秘書たちの過去
第１０話　キューピッドはチキンの骨を持つ
第１１話　坊ちゃまの庶民体験
第１２話　臆病者の逃走
第１３話　ブラインドデート
第１４話　怪しい叔父
第１５話　後継者争い
第１６話　クァク・ジュヒョプ、クビになる

第１７話　会長救出作戦
第１８話　株主総会決戦
第１９話　告白と勇気
第２０話　新たな始まり
第２１話　この身が百回死んで生まれ変わっても
外伝第１話　あの日の失言
外伝第２話　つり革をつかまない理由
外伝第３話　四万五千ウォン
外伝第４話　八十八点
外伝第５話　布団ひとつ
外伝第６話　ダメだ
外伝第７話　一人で越える塀
外伝第８話　上がってこい
外伝第９話　降車ボタン
外伝第１０話　クァク女史の家
外伝第１１話　ヤバクルー
外伝第１２話　一年

第1話　てめえの息の根を止めなかったのが俺の罪だ

この身が百回死んで生まれ変わっても、いちばん後悔することがたったひとつある。
てめえの息の根を、とっとと止めておかなかったことだ。
「カーッ！　兄者の背にピタリとついて参られよ～」
あの野郎……あの野郎！
「ぷっ、なにその喋り方。お前ら武侠小説でも読んできたわけ？」
煙を吐いていた連中が鼻で笑った。
なのにこの野郎は、その嘲笑をそっくりそのまま打ち返した。
「チッチッ、若造どもはやはり何もわかっておらんのう？」
頭痛がしてきた。
ああ、生まれたときにこいつの息の根を止めておかなかったのが、千年経っても晴れない恨みだ。
大学時代につるんでいた頃、せっかく落としかけたナンパの女の子たちを、『じょ～だん♪』の一発で全員吹っ飛ばした男。
一生なんの役にも立たないろくでもない友達。なのに俺はなんで聖母マリアにでもなったみたいに、こいつを懐に入れてしまったんだろう。
俺の人生最大の過ち。それはこいつを友達にしたことだ。

こうなる十分前に話を戻そう。

十分前まで、俺たちはボディガードの面接を終えたばかりで、すっきりした気分で歩いていた。バイト求人アプリでも漁ってチキン屋の面接でも受けるか、なんてどうでもいいことをしゃべりながら。

警護学科を卒業するなり就職先がないと、お互い泣きべそをかいていた。求人サイトで正社員の口を探し、それでダメならバイト求人アプリでチキンの配達でもやるかって。そうやってそれぞれ探していたところに、求人サイトにひとつ募集が上がった。正社員じゃなくて、個人の身辺警護募集。

よっしゃ、これでもいい。すぐに電話をかけた。そしたら今すぐ面接に来いという。

一人暮らしの部屋から近い町だった。すぐにユテに電話して、面接に行こうと誘った。ユテ。あの野郎の名前だ。

そうしてルンルン気分で、あいつと一緒に警護を募集しているという町へ向かった。

なのに、いくら探しても目当ての家が見つからない。なんだよクソ、いたずら電話か？　きょろきょろしていたそのとき、街路樹に隠れた、とんでもなく立派な大豪邸が目に入った。

その家を見た瞬間。来る途中で「うわ、ここめちゃくちゃ金持ちの町じゃん！」と騒いでいたのが恥ずかしくなった。その一軒のせいで、周りの家が全部ミニチュアになっていた。

「こ……ここで合ってんのか？　パク・ユテ」

「う……うん？　合ってるかって？　どれどれ……んー……え……んー……んー……」

ユテもこれから警護する家がこれだから驚いたらしい。スマホの地図と屋敷を、ケチが値札を見比べるみたいに何度も往復して、ようやくスマホから『目的地に到着しました』と音声が流れた。そこでやっと、認めるしか

なかった。
「なあ……俺たち、なんかヤバいとこ引いちゃったんじゃね？」
そうだ。ヤバいどころの話じゃない。
こんなとんでもない金持ちの家だなんて。
俺はせいぜい、ちょっと恨みを買った中小企業の社長あたりを警護するもんだと思ってたのに。ここはなんだ、大企業の会長でも住んでんのか？　それともビル・ゲイツでも住んでんの？
しばらくぼうっとしていると、屋敷の門がギィッと開いた。黒い服をきちんと着こなしたおばあさんがひとり出てきた。
おばあさんはスーツ姿の俺たちを細めた目で何度か眺め回してから、面接に来たのかと尋ねた。
戸惑って、ただうなずいた。すると入れという。
ユテと屋敷の中に入ると、これがもう、ドラマ以上だった。
庭に、彫刻に、畑に、犬に。あとなんだっけ。そうだ、プールもあった！　プールまで！
感嘆が止まらないまま奥へ進むと、面接官は社長でも奥様でもその下の兄弟でもなく、なんと会長秘書だという人物が屋敷の外へ歩いて出てきた。おばあさんとまったく同じように、俺たちを目を細めて見てきた。
「おふたりですか？」
「あ、はい……はいっ！」
なんだよ、こんなにきちんとした顔の人が、人をそんな妙な目で見たらこっちが気まずいだろ？
俺の気も知らず、この秘書がいきなりユテに向かって拳をまっすぐ突き出した。

ユテは本能的にその拳をかわし、警護学科らしく秘書の肘をつかんであっさり制圧した。
『ただの間抜けではなさそうだな』。秘書の顔にはまさにそう書いてあった。俺たちをナメてんのか？　とカチンときたその瞬間、今度は秘書の拳が俺のほうへ素早く飛んできた。
俺は本能的にでも警護学科らしくでもなく、ただ無意識にその拳を食らった。
「ぐっ！！！」
ところが拳を食らった俺の体が大きくよろけたせいで、拳を繰り出した秘書が反動に耐えきれず前につんのめった。
俺は軸足で踏ん張ってスイングしたおかげで倒れなかったが、階段を派手に転げ落ちた秘書はあっという間に土埃まみれになった。
秘書が身を起こしながら、驚いた目で俺を見た。
「す……素晴らしいです！」
秘書は驚いたと言って拍手をした。まあそうだろうな。こんな警護をするやつは初めて見ただろうから。
いや、実のところ警護ですらなかった。秘書は面接は終わりだと言って俺たちを帰した。
素晴らしいもクソもない。腹の中で笑ってるのは見え見えだった。
この面接、俺たちふたりだけなら受かるのはユテだろう。間違いなく。
俺はまた別の仕事を探さなきゃならないのか。
「おーい、クァク・ジュヒョプ！」
「ん？」

「お前とつるんでて、お前みたいに身を挺する警護は初めて見たわ。うははっ～気に入った～さすが俺のダチ～」

この野郎。今、俺のこと笑ってるよな？

なのにユテは本気で誇らしいと言って、俺の背中を引っぱたいた。

叩いたんじゃない。ひ・っ・ぱ・た・い・た。

この野郎……いつかお前の背中に俺の拇印を押してやる。

問題はここからだった。

まさに十分後の状況。

そうやってへらへら笑いながら歩いていたら。なんと、遠くの路地から白い煙がもくもくと立ちのぼっているじゃないか。

二十七年の人生。あれがどういう状況か、ピンときた。

あの路地に入れば、十何人の野郎どもが集まって煙草をふかしているに違いない。

ゆえに、あそこへ行けば俺たちは袋叩きにされる。即座にそう直感した。

ユテが普段から正義感あふれる性格なら、俺は損得を光の速さで計算して避けるタイプだ。

だからいつものように『おい、嫌な予感がするから回り道しようぜ』と言いかけたところだった。

このイカれたパク・ユテの野郎。

いきなり煙草が吸いたくなったとか言って、煙の立ちのぼるあの路地へ歩いていくじゃないか！

こいつ正気か！

あそこ行ったら、いい年した大人がカツアゲされるんだって！
でもパク・ユテが俺の胸中なんて知るはずもない。
俺が慌てて駆け寄ると、さっきまで歩いていたやつが、走る俺を見てにやりと笑いながら言うわけだ。
「ははは～やだね～お前には煙草やらないよ～俺だけ吸うんだもんね～」
このクソ野郎！　さっさとこっち来い！！
なのに、やらないとかほざきながら、さらに走っていくじゃないか！
うわ！　あいつマジで頭おかしくなりそう。
そして俺の予想どおり、制服姿の十何人かに図々しく近づいていった。
「兄ちゃんに煙草一本ちょうだい」
カツアゲしてるじゃないか！
危険を察知した俺は、こりゃダメだ、せめて俺だけでも逃げようと立ち止まった。すぐに知らない人のふりをして歩き去ろうとしたところだった。
なのに……なのに！　このクソ野郎は……！
「おーい、ジュヒョプ～！　こいつら煙草貸してくれないんだけど？　ここ、ひっくり返しちゃう？」
それを俺のほうに向かって、片腕をぶんぶん振りながら大声で叫んだのだ。
うわ！　うわマジか！　うわこの野郎！　うわ！！！！
本気で知らんぷり、聞こえないふりをして行こうとしたのに、遠くからこの野郎が確かに俺のほうを見て大声で叫んだ。

「ジュ～ヒョ～プ～」
結局、俺は……こうして……この煙の集団と向き合うことになった。
このろくでもない状況をわかってもいない、このクソったれユテの野郎は、両手首をぶらぶらさせながら叫んだ。
「カーッ！　若造ども～兄者に叱られてみるか？」
叱られるのはお前だ、バカ。
「うわ、おっさん。目ついてる？　ここにいる俺らが見えないわけ？」
「どこ、どこにいるって？　俺の目にはひよこしか見えないけど？」
ユテはそう言うと、俺のほうを見て笑った。
「なあクァク・ジュヒョプ。このかわいい子たち、ちょっとしつけてやろうか？　な？」
いや、このクソったれがあああ！！！　いくら警護学科でも、俺らふたりでこの人数相手にできると思ってんのか！！！　俺らはヒーローか？　十七対一で戦えってか！？
これはダメだ、せめて俺だけでもこの若いお友達をなだめなきゃと思い、にっこり笑って言った。
「えっと……お友達？」
「……」
「俺の友達、ちょっと武侠小説読みすぎててさ。きみたちがちょっと大目に見て、お兄さんたちを見逃してくれないかな？」
だが連中に見逃す気はさらさらなさそうだった。

「お……俺が！　こいつ思いっきりぶん殴っとくから。な？　だからきみたち、ちょっとわかってくれ……！」
「……」
「こ、こいつちょっと頭がアレなやつでさ……あははは……」
なのにユテは空気が読めなかった。俺が聖母マリアにでもなったみたいに救ってやってるのに、この野郎は！
「おい！　かかってこい！」
やめろ、頼むからやめてくれ！　俺は……俺は！　俺は拳が使えないんだよ！！！　ちくしょう！！
ところがそのとき。不良たちが、モーセの奇跡みたいにさっと割れた。
なんだこれ？　状況をつかもうとじっと見た瞬間、背の高い少年……いや、少年と呼ぶには他の連中よりずば抜けて体格がよく、ひと目見ただけでただ者じゃない雰囲気の男が歩み出てきた。
そう、男だった。
連中と違って制服を着ていないところを見ると、少し年上のようだった。
騒ぎが気に障ったのか、短い黒髪の男は思いきり顔をしかめていた。
もちろん、ポケットに手を突っ込んで。
「なんだ？」
鋭く苛立って顔をしかめる男。どう見てもこの不良グループのボス格だった。
でも同年代って感じでもないし……。
今のこいつは……静かにしていたいのに……誰かに邪魔されて頭にきている状態。
だとすれば……。

あいつを怒らせたら俺たちはボコボコ、怒りを鎮めれば逃げられる。
俺の素早い頭脳がはじき出した結論はこれだった。
場の空気をぶち壊して、その隙にユテの野郎と全力でずらかる。
そう、それが正解だった。
そう、そこまではよかった。
なのに、どう切り抜けるか考えるより先に、俺のイカれた口が勝手にしゃべっていた。
そうして俺の口から飛び出した言葉は、
「ぼ……坊ちゃま！」
一度も顔を見たことのない相手に、坊ちゃま呼ばわりだった。
その瞬間、一同沈黙。
一同困惑。
一同、同じことを考えた。
「こ……こいつ、なんなんだ？」
その男も急に戸惑ったのか、今こいつなに抜かしてんだ？　という顔をしていた。
恥ずかしすぎた。
みっともなさすぎた。
穴があったら入りたかった。
でも天が与えてくれたこのタイミング。チャンス。

「ぼ……坊ちゃま！　奥様がお呼びですので、私どもはこれで失礼いたします！」

俺は即座に、ぽかんとしているユテの首根っこをつかみ、小学校の運動会で死ぬ気で走ったときよりも速く走った。

なぜかって？

恥ずかしかったからだ。ちくしょう。

第2話　この一家のノリはいったいどうなってるんだ

神が俺に下した使命はたったひとつだった。

イカれたパク・ユテの息の根を止めること。何百回、何千回でも挑むこと。

もちろん、どれだけかかっていこうがユテが俺をあっさり制圧するのは目に見えていた。それでもあいつの息の根は止めなきゃならなかった。二十七年の人生で初めて味わった屈辱だったんだから。

「あのひょろでかい野郎に坊ちゃまってなんだよ、坊ちゃまって！」

拳を繰り出すと、ユテはおとなしく殴られてくれるかと思いきや、すぐさま制圧して不満たっぷりの声で叫んだ。

「いや、お前があいつを坊ちゃまって呼んだのを、俺にどうしろっての」

「お前が！　お前があんな状況を作らなきゃよかったんだろ、このクソ野郎！」

お前はもうちょっと殴られなきゃダメだ。

手のひらであいつの背中を引っぱたくと、悔しげな悲鳴が上がった。ユテのやつ、今ごろ顔をくしゃくしゃにしかめてるだろうな。

そうだよ、俺は拳は使えなくても平手は痛いんだよ、このクソ野郎！　天もほんとに無情だ。仏様より広い度量を俺に授けてくださるなんて。

こんなのを友達だと連れ歩いてる俺が問題なんだ、問題。

ユテの背中をバシバシ叩いていると、遠くの道を歩いていたちびっこがこっちを見て、母親の手をぎゅっと握って叫んだ。

「お……お母さん！　ウサギがポロロ叩いてる！」

ああ、忘れてた。

お前はペンギンのポロロで、俺はウサギだってことを。

ウサギの着ぐるみをかぶったまま、容赦なくユテの背中を叩きまくっていたのだ。

そのときユテは、自分がポロロの着ぐるみをかぶっていることをうっかり忘れていたらしい。

「こいつ、なんでさっきから叩くんだよ！」

そう言って俺をどんと突き飛ばした。

後ろに倒れた俺は起き上がろうとじたばたした。でも着ぐるみの重さが半端じゃなくて簡単には起き上がれず、ユテはそのまま俺の上に乗っかった。

「クァクのバカ頭め、思い知れ！」

ユテなりに仕返しのつもりで乗っかったんだろうが、見ていたちびっこの考えは違った。

「お母さん！！　ポロロがウサギ襲ってる！！！」

ガキのくせにませやがって。なんて言い草だ。

ユテが俺の上に乗っかっている姿を見るなり、母親は思いきり顔をしかめ、子どもの教育に悪いと言って急いで子どもを連れて去っていった。

あ、ああ……パク・ユテ。パク・ユテ。パク・ユテ！！！